

平成31年度 唐津市立久里小学校 学校評価計画

1 学校教育目標						
豊かな心を培い、夢の実現に向かって、いきいきと活動する子どもの育成						
2 学校経営ビジョン						
<p>1 子どもたちが誰もが「楽しくわかる」「毎日通いたい」と思うことができる久里小学校</p> <ul style="list-style-type: none"> ・「楽しくわかる授業」の実現、家庭と連携した基本的な生活習慣、学習習慣の定着を図る。 ・豊かな心を持ち、認め合い、支え合い、思いやりのある子どもを育成する。 ・自他の命を大切に、心身ともにたくましい子どもを育成する。 <p>2 保護者・地域が安心して信頼して任せることができる久里小学校</p> <ul style="list-style-type: none"> ・特色ある学校づくりを推進し、家庭、地域に信頼される学校をめざす。 <p>3 教職員が毎日意欲をもって勤務することができる久里小学校</p> <ul style="list-style-type: none"> ・弛まぬ学校経営や教育活動の評価・点検による学校の活性化及び教職員の資質向上をめざす。 						
3 本年度の重点目標			4 前年度の成果と課題			
<p>①全教育活動を通して、基礎・基本の指導を徹底し、学習内容の確実な習得を図ると共に、「主体的・対話的で深い学び」の実現をめざす。</p> <p>②感動する心と思いやる心、郷土を愛する心を育むとともに、自己肯定感を育み、よりよい生活・人間関係づくりの構築をめざす。</p> <p>③価値ある行事・体験活動を通して一人一人が達成感を味わい、自発的に計画し実践する力を育て、共に支え合う仲間づくりを進める。</p> <p>④子どもの運動習慣を把握し、健康や成長のためには運動が欠かせないことを理解させ、何事に対しても最後までやりとげる心構え及び運動習慣の形成に努める。</p>			<p>全体的な評価としては、前年度の重点目標について概ね達成できたと言える。各重点目標については、下記のような状況であった。</p> <p>【①全教育活動を通して、基礎・基本の指導を徹底し、学習内容の確実な習得を図るとともに、「主体的・対話的で深い学び」の実現をめざす。】</p> <p>学力向上については、県の学力調査でどの教科もほぼ平均値を修めた。これは、児童の思考に沿った授業展開を目指し全校で学習過程を統一したことにより教師側の目的意識が明確になり、児童も主体性をもって交流活動に取り組んだためと考えられる。また、この取り組みについては、91%の保護者から高い評価を受けている。本年度は更に朝の学びの時間を設定し、低学年は基礎的・基本的内容について、高学年は活用する力を意識した問題に取り組んできた。ICTの利活用については、昨年度よりさらに職員が活用が進んでいる。全学級が取り組んだ校内研究においてもICTを取り入れ有効に活用した授業が多くみられた。</p> <p>【②感動する心と思いやる心、郷土を愛する心を育むとともに、自己肯定感を育み、よりよい生活・人間関係づくりの構築をめざす。】</p> <p>「あいさつ」「ろう下歩行」「無言掃除」「はき物を揃える」を生活の4本柱として年間を通して取り組み、意識して生活が出来るようになってきた。毎月1日に「なかよしアンケート」を実施し児童の様々な思いをすくい上げる取り組みと共に、年間2回のQ-Uアンケートを実施して児童や学級の状況を客観的に把握することにも取り組んだ。以上のことから保護者の96%が「楽しんで学校に登校している」と回答し、児童も「なかよしの友だちがいる」と95%が回答している。本年度は人権・同和教育を推進するために毎月の全校朝会で、教師が人権に関する講話を行い人権について考える機会を設けた。</p> <p>【③価値ある行事・体験活動を通して一人一人が達成感を味わい、自発的に計画し実践する力を育て、共に支え合う仲間づくりを進める。】</p> <p>全校的な取り組みとしてはグループ集会や縦割り班での活動、全校での集会活動などに年間を通して取り組んだ。また、学級では道徳や学級活動の時間に、児童一人ひとりのよさに気付かせたり、友だちとの良い関係に気付くことの大切さなどを授業で取り上げたりした。体験活動では、5年生が農業体験をしたのをはじめ、3年生がグループホームを訪問した。各学年が地域との連携を密にしている様々な体験活動を行った。その結果、保護者の95%が「取り組んでいる」と評価し、児童の95%が「久里地区はいいところだと思う」と回答している。各学年の取り組みが理解され児童も地域のよさを感じていることが分かる。</p>			
5 総括表						
①全教育活動を通して、基礎・基本の指導を徹底し、学習内容の確実な習得を図るとともに、「主体的・対話的で深い学び」の実現をめざす。						
領域	評価項目	評価の観点 (具体的評価項目)	具体的目標	具体的方策	評価及びその理由	成果と課題
学校運営	○活用力研究の深化	・新学習指導要領の円滑な実施につながるよう、また主体的・対話的で深い学びの実現を期した授業研究を進め、活用力の育成を期した校内研究を推進する。	・『算数科で「わかった」「できた」と思うことが増えてきた』といえる児童を80%以上にする。 ・「な・か・よ・し」の学習段階の中にパーソナルワーク・グループワーク・クラスワークを効果的に設定した授業作りをする。 ・グループワークの進め方の習熟を図り、協働学びの充実を目指す。	・校内研で、以下のことを中心に研究を進める。 ○考える楽しさを味わわせる授業作りの進化(学習過程・時間配分) ○交流活動の定着化(友だちタイム・みんなでタイム) ○振り返りの充実(「よさをみつけよう」「しっかりわかったよ」適用問題)	A ・「算数科で「わかった」「できた」と思うことが増えてきた」児童は89.9%である。 ・全クラスの授業研究会を中心に「考える楽しさを味わわせる授業作りの深化」「活用する力を伸ばす工夫」「交流活動の定着化」「振り返りの充実」を柱とし、授業の改善を図った。指導案検討や事後の話し合いで成果と課題を共有し、日々の実践に生かしている。 ・「なかよし」の学習過程にPW・GW・CWを組み込む授業スタイルができ、教師も児童もその流れに慣れ、学習を進めることができている。 ・GW・CWを繰り返し行うことにより、話し合いの深まりを図った。 ・「もう一度一人でタイム」の重要性を共通理解し、振り返りを充実させようとしている。	・算数科では、学習過程や交流活動に対する共通理解が深まり、日々の授業に浸透してきた。児童もまず自分で課題に取り組み、主体性をもって学習に取り組むようになってきた。さらに、「わかった」「できた」の実感を持ち、考える楽しさを味わう授業作りを目指す。 ・全クラスが授業研究会を行うことにより、授業について話し合う機会を持ち、授業改善につながった。 ・GW・CWでは、自分やグループの考えを発表することはできるが、その後質問・意見を織り交ぜながら、考えを深めていくことが難しい。「なぜ?」「どうして?」「もう一度」という声を出しながら、根拠や筋道を明確にしてい話し合いを模索する必要がある。 ・授業の最後に振り返りを書くことには慣れてきた。「もう一度一人でタイム」の時間を確保し、CWまでの話し合いを自分のものにする必要がある。
教育活動	●学力向上	・新しい時代に対応した学習内容の構築、児童理解に基づく分かる授業を実施する。 ・読書に親しみ、豊かな心を育成する。	・標準学力検査(1～3年)及び、県学力調査(4～6年)で平均値を目指す。 ・家庭学習の目標時間(学年×10分+10分)の達成率を80%を目指す。 ・読書30選の達成率60%を目指す。	・「くりのこタイム」(15分)を設定し、基礎的・基本的な学習の定着を図る。 ・家庭学習の手引きを配布し、保護者への啓発をする。 ・読書を推進する。(さわやか読書・読書30選・図書館祭りなど)	A ・「くりのこタイム」は、学年に応じて国語・算数の基礎的・基本的な学習を進めた。高学年は活用する力を意識したプリント学習なども行った。 ・保護者アンケートで「自分の子供は楽しんで学習している。」の項目は88%という高評価を得た。 ・年度当初に中学校区共通の家庭学習の手引きを配布し児童に話すとともに、懇談会で保護者にも理解を促した。保護者の「家庭では、家庭学習の習慣化に努めている。」は76%であり、児童の「決められた時間学習している。」は77%である。 ・読書について、児童は「家で読書をしている。」は56%、保護者は「子供は家庭で読書している」は47%と低い。読書30選の達成率は26.3%(1月24日現在)である。	・くりのこタイムは朝の学びの時間として定着してきた。更に充実した内容になるよう各学年に合った内容を計画的に進めたい。また、活用する力を意識した問題にも取り組む機会を増やしたい。 ・家庭学習については通信や懇談会などで引き続き保護者への啓発を行い、連携する必要がある。また、自学ノートの取り組みを進め、自分で決めた課題に取り組むことや、学習に関連した課題に取り組むことなどを日常化させたい。 ・低学年は読書の時間を設けて図書室へ足を運ぶ機会が多い。高学年は図書の時間を設けることは難しいが、休み時間を利用して足を運び、貸し出し数をのばしている児童もいる。今後も継続して声かけを行い、読書に親しませたい。
②感動する心と思いやる心、郷土を愛する心を育むとともに、自己肯定感を育み、よりよい生活・人間関係づくりの構築をめざす。						
領域	評価項目	評価の観点 (具体的評価項目)	具体的目標	具体的方策	評価及びその理由	成果と課題
教育活動	くらしづくり	・あいさつ、規律ある生活(規範意識)、清掃活動等を徹底させる。 ・特別支援教育の充実・深化を図る。 ・危機管理(災害対応マニュアルの見直し)の徹底と防災体制の構築・充実を図る。	・「あいさつ」「ろう下歩行」「無言掃除」「はき物を揃える」を、本校の生活の四本柱として目標に据え、年間徹底して取り組む。年間を通して達成できる児童を90%にする。 ・安心して学習できる支援体制を整える。 ・災害時に自ら正しく判断し、行動できる児童を育てる。	・児童の生活カードの項目の中に、「生活の四本柱」を必ず入れて、毎日、継続的に達成できているか振り返らせ、児童への意識化を図る。 ・学習に遅れがちな児童は、特別支援学級担任や級外が個別支援にあたる。 ・昨年度の反省を生かし、様々な災害を想定し、年間を通して5回の各種避難訓練を計画的に行う。	A ・「元気で気持ちのよいあいさつ」は、保護者の85%、児童の81%であった。 ・「友だちと協力して無言そうじをしている」については、児童の72%であった。そうじをする時の態度にさほど変化はなく、ポイントが昨年を大きく下回ったのは、意識の変化によるものととらえることができる。 ・「くつやスリッパをそろえている」については、児童の89%であった。 ・「ろうかや階段を静かに歩いている」が、児童の76%であった。 ・避難訓練については、年間5回を予定していたが、今年度は6回に増やした。	・「あいさつ」については、保護者アンケートでは、4%が向上している。朝、校長先生と行儀のよい挨拶を教えてもらっているので、立ち止まって挨拶をする児童が大きく増えていることも一因と考えられる。しかし、どの児童も挨拶が十分にできているとは言えない。児童アンケートでは、%を下げていることからそれが分かる。学校外からは、もっと良くなってほしいという声もあるので、「いつ、どこでも、だれにでも」元気に挨拶ができるよう指導を徹底していく。 ・「履物をそろえる」については、昨年より11%向上しているが、場所による差が依然みられる。特にトイレ掃除の工夫と改善を行い、きれいなトイレを使いたいという意識を高めていきたい。 ・「ろうか歩行」は%が低下している。特別教室などへは、静かに移動することができているので、休み時間の行き帰りを意識させていきたい。 ・「楽しく登校できるように」はおおむね好評をいただいているので、地域との交流や体験活動の充実を図ることなどで、更に高められるようにしていきたい。 ・避難訓練については、社会的ニーズの変化から、回数を増やしている。避難経路を新しく開拓することもできた。
教育活動	●いじめ問題への対応	・いじめを許さない土壌作りと防止対策の充実を図る。	・「なかよしアンケート」や児童のこまめな観察・保護者との面談等を通して、いじめの早期発見、全職員での共通理解、適切な対応に努める。 ・一人ひとりがクラスで楽しい学校生活を送れるようにする。 ・いじめに対する職員の見識力を高め、いじめの防止に努める。	・毎月1日に「なかよしアンケート」を実施し、児童の様々な思いを素早くすくい上げられるようにする。慎重な対応が必要な場合は、生徒指導協議会で共通理解し、児童の支援に役立てるようにする。 ・クラスの雰囲気や適応していない児童を客観的に把握して、一人一人が楽しい学校生活を送れるように仕向ける(Q-Uアンケートなど)。 ・教師がいじめの残酷さを強く理解することで、児童間のいじめの認識力を高め、日常的にいじめ防止に努める(いじめに関する職員研修)。	A ・意識調査で、「学校は、子どもたちが楽しく登校できるように努めている」と回答したのは保護者の89%であった。学校へ行くのが楽しいと答えた児童は78%であった。 ・今年度もQUアンケートを行い児童の実態の把握と結果をもとにした対応策をたてた。 ・いじめに関する職員研修も行うことができた。	・保護者からの回答は4%向上し、児童は昨年と同じ回答であったことから、毎日楽しんで学校生活を送り、友だちとも仲良く過ごしていることが察せられる。 ・毎月一回の「なかよしアンケート」で、不安や悩みを抱えている児童を迅速に把握するように努めているが、そこに表れない一面もある。そうした気がかりな面については日頃の観察で把握し、児童に寄り添った指導を心掛けていく必要がある。 ・QUアンケートで把握した実態に即して、道徳の授業や特別活動でのエンカウンターなどを行い、児童の心を耕す手立てをとることができた。 ・教職員間のいじめに対する意識の高まりが、児童に好影響を及ぼしている。トラブルが小さいうちに児童が解決を求めて担任へ相談することが増えている。

③価値ある行事・体験活動を通し一人一人が達成感を味わい、自発的に計画し実践する力を育て、共に支え合う仲間づくりを進める。

領域	評価項目	評価の観点 (具体的評価項目)	具体的目標	具体的方策	評価及びその理由	成果と課題
教育活動	こころづくり	・特別活動の充実を図る。 ・体験活動を重視する。 ・地域との連携を進め、開かれた学校づくりをめざす。 ・人権・同和教育を積極的に推進する。	・特別活動の行事を工夫し、ともに支え合う仲間づくりを進めることで、皆との活動が楽しいと思う児童を育てる。 ・学校での行事が好きと思える児童を増やす。 ・家庭や地域の良さを理解し、行事について自発的に計画し、主体的に実践する児童を育てる。 ・人権・同和教育の視点に基づき、人権意識を高める指導を行う。 ・全教育活動を通して、人権が尊重される人間関係づくりや、いじめや差別・偏見をなくそうとする心情・態度を育てる。	・仲間づくり、たて割り班での異学年との交流、全校での集会活動などを通して、よりよい人間関係の構築を図る。 ・各教科や総合的な学習の時間では、体験的な学習を多く取り入れ、仲間とともに実感を伴う活動の場を設定する。 ・運動会や児童集会など様々な行事を通して、地域との連携を密にしていく。 ・日常の教育活動全般において、お互いの違いやよさに気づき、自他ともに大切にすることを育む(朝の会や帰りの会、たてわり班活動、人権ポスター・人権標語、平和集会、人権教室など)。	A ・保護者の95%が「よりよい仲間づくりを行っている」とし、児童の82%が「たて割り班活動が楽しい」と回答している。 ・「子どもたちのよりよい人間関係を育むための道徳教育や仲間づくりを意識した取り組みを行っている」と受け止めている保護者が、昨年度の91%から今年度は94%へ向上した。 ・保護者の95%が「地域の人とかかわりを深め、地域のよさに触れる取り組みを行っている」としたが、「地域のひとふれあう行事に進んで参加したり楽しんだりしている」と答えた児童は72%であった。 ・全児童が人権や平和について考え、人権ポスターや人権標語、平和宣言を作った。また、今年度は全児童で話し合い、「呼び捨て・あだ名〇宣言」を作った。	・よりよい仲間づくりについては、100%を目指し、道徳や特別活動、集会活動の内容を見直し、工夫していきたい。 ・たて割り班活動では6年生がリーダーとなり、異学年交流を活発に進めることができた。 ・児童一人ひとりのよさに気付かせたり、友達とのよりよい人間関係を築くことの大切さを考えさせたりする活動をこれからも続けていきたい。 ・どの学年においても、地域の人やよさに触れる機会をつくってきたい。 ・人権や平和について考え、実践していく学習をこれからも続けていきたい。

④子どもの運動習慣を把握し、健康や成長のためには運動が欠かせないことを理解させ、何事に対しても最後までやりとげる心情及び運動習慣の形成に努める。

領域	評価項目	評価の観点 (具体的評価項目)	具体的目標	具体的方策	評価及びその理由	成果と課題
教育活動	●健康・体づくり	・運動週間の形成に努める。 ・食育を推進し、健やかな体作りを進める。	・マラソン大会、なわとび大会等の体育的行事を活発に行う。 ・「スポーツチャレンジ」の取り組みを推奨する。 ・朝食の摂取率100%以上を目指す。 ・各クラスで児童の実態に応じた食育の授業を実施する。	・学習カードや体育用具を充実させ、いつでも誰でも使えるように整備する。 ・運動場が整備されたことをきっかけに、リレー大会、なわとび大会などの実施や県の「スポーツチャレンジ」への積極的な参加を促すことで、日常の学校生活での外遊びを奨励する。 ・年1回以上は、食に関する授業を実施する。 ・給食委員会が中心となり、食事の栄養やバランス等を考える集会を行う。 ・児童の実態を把握し、保健だよりや体験授業等を通して、食育の大切さを保護者へ知らせる。	B ・サッカーボール、一輪車を寄附してもらった。マラソンカード、なわとびカードの作成を行った。 ・「体育の授業実践やスポーツチャレンジに取り組んでいる」の項目では、職員の72%が取り組んでいると回答している。 ・「わたしは、体育の時間や休み時間に体を動かすことが好きだ。」の項目では14%の児童が「好きではない」と回答している。 ・「わたしは、朝ご飯を食べて登校している。」の項目では99%の児童が食べていると回答している。 ・「子どもは、朝ご飯を食べている。」の項目では、97%の保護者が食べていると回答している。	・体育用具はここ数年で新しいものを購入してもらったり、寄附してもらったりしており、充実しつつある。体育倉庫の整理を予定していたが、悪天候のためできず、使いにくいままになっている。 ・体力テストの結果では、シャトルラン以外のほとんどの項目で佐賀県の平均を下回っている。スポーツチャレンジの取り組みも少なく、声掛けが必要だが、2年生の「ドッジボールラリー」で、標準記録を上回る事ができた。 ・体育委員会の外遊び企画でPK大会に取り組んでから、休み時間にサッカーをする児童が一時期増加した。外遊びをこれからも推奨していきたい。 ・低学年や6年生で給食試食会を実施し、保護者に給食指導の様子を見て頂いた。 ・おにぎり弁当の日や2年生の野菜の栽培、5年生の米作り学習などを通して児童や保護者の食育への関心、意欲を高めることができた。 ・栄養や食事について学習していることを日常の食生活や食習慣にいかしていけるように指導を行いたい。

本年度の重点目標に含まれない共通評価項目

領域	評価項目	評価の観点 (具体的評価項目)	具体的目標	具体的方策	評価及びその理由	成果と課題
学校運営	●業務改善・教職員の働き方改革の推進	・タイムマネジメントを考え、職務遂行を行う。	・効率的な業務を推進するために、情報共有化を図り、時間外勤務時間が1か月あたり40時間未満の教員の割合を9割以上とする。	・職員会議の議題案等を年度当初に示し、あらかじめ各部担当職員の意識を高める。 ・特定の職員に業務が集中しないようにマネジメントを行う。 ・定時退勤日を週に1日設ける。	B ・毎月行う職員会議案を示し、それに対する事務を意識できるようにした。 ・特定の職員に業務が偏らないように、各部で配分してもらった。 ・時間外勤務時間が1か月あたり40時間未満の教員の割合が88%だった。	・年間の職員会議議題を示しただけになった感じがある。来年度はそれをもとに各部内の担当者が意識して取り組めるようにしたい。 ・定時退勤を勧めるだけでなく、業務の精選を行う。

6 総合評価

全体的な評価としては、本年度の重点目標について概ね達成できたと言える。各重点目標については、下記のような状況である。
 【①全教育活動を通して、基礎・基本の指導を徹底し、学習内容の確実な習得を図るとともに、「主体的・対話的で深い学び」の実現をめざす。】
 学力向上については、県の学習状況調査の結果は半分の教科で県平均値を上回ったが、昨年度と比較すると下降傾向となった。しかし、算数科を中心とした授業研究会において授業改善を図り、成果と課題を共有して、日々の授業にいかすこと、グループワークを工夫して話し合いの深まりを図ったことなどにより、『算数が「分かった」「できるようになった』』と回答する児童の割合が高くなった。また、保護者アンケートでも「自分の子供は、楽しんで学習している」の項目で88%という高評価を得た。一方、家庭での読書については47%、家庭学習の習慣化については76%と低くっており、今後対応を検討しなければならないと考える。
 【②感動する心と思いやる心、郷土を愛する心を育むとともに、自己肯定感を育み、よりよい生活・人間関係づくりの構築をめざす。】
 児童は「あいさつ」「ろう下歩行」「無言掃除」「はき物揃え」を『生活の4本柱』として意識して生活をしている。ただ例年のように、校内でのあいさつはできているが校外でももっと上手になってほしいという声が聞かれた。「はき物をそろえる」については、昨年から11ポイントも向上した。場所による差も依然みられるが、どの場所でも変わらずきれいに使いたいという意識を高めていきたい。保護者の意識調査からもわかるように、児童にとって学校は安心して暮らすことのできる場所になっている。児童に寄り添う教職員の存在が大きいと考える。
 【③価値ある行事・体験活動を通し一人一人が達成感を味わい、自発的に計画し実践する力を育て、共に支え合う仲間づくりを進める。】
 特活部を中心に児童主体の話し合い活動を行った。その中で「呼び捨て・あだ名〇宣言」を作った。そのことが、友達とのより良い関係を作る一つのきっかけとなったと考える。また、学校内だけでなく、地域の方との交流や学習活動を行うことで、より地域に根差した教育活動を行うことができた。
 【④子どもの運動習慣を把握し、健康や成長のためには運動が欠かせないことを理解させ、何事に対しても最後までやりとげる心情及び運動習慣の形成に努める。】
 「運動が好きではない。」と答えた児童の割合が14%をしめている。そのような児童にも、運動に慣れ親しむために、体育学習を行う上での用具は少しずつ揃ってきた。また、佐賀県が推進する「スポーツチャレンジ」にも参加するよう、保体部を中心に声掛けと、実践を行った。その中で、2年生は一つの種目で平均を上回る成績を残した。また、食の大切さに触れさせるために、体育科だけでなく、総合的な学習の時間や生活科の時間を使って、稲作体験や野菜の栽培を行った。

7 来年度の改善策

- ①【日々の授業改善】
 - ・単位時間あたりの学習課題(めあて)を明確にし、その課題解決に向かって「一人学び(PW)」と意味のある「グループ学び(GW)」全体学び(CW)」を行いながら、課題に応じた具体的な「振り返り」を徹底継続する。
 - ・教師が「深い学び」を意識し、単元全体を見据えた授業づくりを行う。
- ②【日々の心育で】
 - ・「生活四本柱」(あいさつ・ろうか歩行・無言掃除・はき物揃え)を徹底させ、生活態度を安定させる。
 - ・学校生活全体での児童の「よさ」(善行)を認め広めながら、「素直で誠実な心」を育てる。
- ③【計画的な仲間づくり】
 - ・縦割り活動や集会活動を中心とした体験活動を積極的に行う。
 - ・児童に「役割」や「出番」を与え、活動の過程を含めた肯定的な「承認」を全職員で行うことで、自己有能観や肯定感を高めるとともに、集団で達成すること喜びや楽しさを味わわせる
- ④【運動・スポーツ習慣の形成】
 - ・体育の授業を中心として、自分や友達の体への気付き促し、運動のもつ「機能的な特性」を十分に味わわせる
 - ・外遊びや体育的行事を奨励し、運動やスポーツとの関係を密にさせていく。